

氏名	姚 琮		
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）		
学位記番号	博甲第 198 号		
学位授与の日付	2015 年 3 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文の題目	現代社会における祭祀儀礼の変化と伝承 —スサノオ神話に由来する疫病退散儀礼を中心として—		
論文審査委員	主査	神奈川大学 教授	小 熊 誠
	副査	神奈川大学 教授	佐 野 賢 治
	副査	神奈川大学 教授	安 室 知
	副査	東京文化財研究所 名誉研究員	星 野 紘

【論文内容の要旨】

本論文は、スサノオ神話に由来する疫病退散儀礼を対象として、現代社会における祭祀儀礼がどのように変化し、そしてどのようにそれが継承されているのかを実証的な調査を通して民俗学的な視点で考察した。

本論文の構成は、以下のとおりである。

序章

- 第 1 節 問題提起と研究対象
- 第 2 節 先行研究
- 第 3 節 研究の方法とフィールドワークの設定
- 第 4 節 スサノオ神話に由来する疫病退散儀礼の歴史的な経緯

第 1 章 祭祀儀礼の変化から見る地域のアイデンティティー—神奈川県横浜市鶴見区生麦地区「蛇も蚊も祭り」を事例として—

- 第 1 節 問題提起と本章の目的
- 第 2 節 研究対象の背景
- 第 3 節 現代社会における「蛇も蚊も祭り」の構造
- 第 4 節 現代の「蛇も蚊も祭り」の「目に見える」変化
- 第 5 節 現在の「蛇も蚊も祭り」の「目に見えない」変化
- 第 6 節 「蛇も蚊も祭り」のスサノオ神話との関わり

小括

第 2 章 祭祀儀礼の変化と持続——三重県津市白塚「やぶねり」神事を事例として

- 第 1 節 問題提起と本章の目的
- 第 2 節 研究対象の背景
- 第 3 節 「やぶねり」神事の構造
- 第 4 節 現在「やぶねり」神事の変化と担い手の捉え方

小括

第3章 地域活性化事業の推進と祭祀儀礼の変化——茨城県行方市麻生町天王崎「馬出し祭り」を事例として—

- 第1節 問題提起と本章の目的
 - 第2節 研究対象の背景
 - 第3節 「馬出し祭り」の構造
 - 第4節 「馬出し祭り」に対する分析
 - 第5節 現在の「馬出し祭り」の変化
 - 第6節 変化に対する捉え方
- 小括

第4章 地域の観光化と祭祀儀礼の変化—大阪府大阪市難波「綱引き」神事を事例として

- 第1節 問題の提起と本章の目的
 - 第2節 研究対象の背景
 - 第3節 難波「綱引き」神事の構造
 - 第4節 現在の難波「綱引き」神事の変化
 - 第5節 考察
- 小括

終章

序章では、日本の民俗宗教における祭祀形態の変化という問題領域を設定し、まず民俗事象の変化を社会環境の変化に伴う「目に見える変化」と「目に見えない変化」の存在を指摘した。伝統的な祭祀儀礼の変化に対する認識について、従来の研究者の認識と当事者の認識に違いがある点について本論では当事者の認識を実地調査の中で確認することを分析視点の中心に置くことを論じた。つまり、儀礼が変わって行くことの受動的側面だけでなく、そこに関わる人々の主体的能動的な働きかけを見ることによって、変化しつつある祭祀儀礼の中で伝承者の主体性に関する考察を本論の目的とすることを論じている。そして、その研究の対象をスサノオ神話を由来とする疫病退散儀礼とすることによって、従来の歴史的変化を述べる研究から現代の変化を中心に当事者の主体性を民俗学的に研究する研究への展開と発展性を志向する本論の研究史的位置づけを述べている。

第1章は、横浜市鶴見区の「蛇も蚊も祭り」を対象として、この祭りの「目に見える変化」と「目に見えない変化」を分析し、現代社会におけるこの祭りの社会的役割を論じた。前者は、祭祀組織が保存会に変化したこと、祭りの要素が現代社会に対応するよう変化したこと、儀礼の病気退散要素の変化などが述べられている。後者としては、当事者へのインタビューから「蛇も蚊も祭り」を行うことによる地域アイデンティティの変化などが指摘された。そのことから、都市の中にあるこの地域社会に様々な変化が生じ、それに対応して祭りも変化しつつも、その祭りの伝統的要素を保持することによって祭りの当事者である地域の人々の間に地域アイデンティティが確立されていることを論じた。

第2章では、三重県津市の「やぶねり」神事を事例として、伝承者の視点から見る祭祀儀礼の変化を分析した。この神事では、竹と綱などで作る「やぶ」というヤマタノオロチを模した棒を担いで地域を巡行する。その方法は、青年団だけで巡行できないなど地域の高齢化と少子化によって様々な点で変化が生じている。その他、やぶに使う漁網が地域による違いがあったものの、漁師の減少という産業変化により統一されたとか、巡行の際にやぶを家の土間に引き入れていたものが土間の消滅によってその儀礼がなくなったなど、祭祀の構造も大きく変化している。しかし、当事者はこれらを神事の変化とは認識していない。神事の日時、神事を行う神社、やぶを海に流すこと、

これらが神事の「原型」であり、これが変わらない限り神事が変化したとは認識せず、むしろ祖先から伝えられてきた神事をそのまま堅持していて、神事は変化していないと当事者は認識している点を指摘した。

第3章は、茨城県行方市麻生町の「馬出し祭り」を調査し、祭祀儀礼の変化を追いつつ地域活性化事業にこの祭りがいかに関わっているかを分析した。「馬出し祭り」では、馬がヤマタノオロチの象徴とみなされ、神輿がスサノオの象徴とみなされている。この祭りのクライマックスは、八坂神社における神輿と馬の対決である。それは、スサノオのヤマタノオロチ退治に擬された祭りのパフォーマンスであり、近年ではそれを目当てに多くの写真愛好家が集まるようになった。

この祭りでは、ヤマタノオロチが馬に擬されているが、それは神社の歴史と深い関わりがある。現在八坂神社の祭神はスサノオであるが、明治に神仏判然令が發布される以前においては、この祭神は牛頭天王だった。それ以前には、牛頭天王が馬に乗って地域を巡行することで疫病退散をするというモチーフの祭りだったものが、明治以降祭神がスサノオに変えられたことによって、馬をヤマタノオロチとして象徴させ、オロチ退治のモチーフに変化したと考えられる。この点は、現在の当事者たちはほとんど知らず、この祭りは、もともとスサノオのヤマタノオロチ退治神話に由来した祭りだと思い込んでいる。そして、飾りをつけた馬が一軒一軒回って家族の一年の無病息災を祈ることがこの祭りの重要な部分だと考えられている。

「馬出し祭り」において、馬は重要で、かつてはこの地域は馬の産地でもあり、多くの家で農耕用に馬を飼っていたので10匹もの馬がこの祭りに出ていた。しかし、昭和30年代以降、農作業で馬を使う人もいなくなり、馬出し祭りに手作りのにわか馬を使っていた時期があった。馬が出なくなったので、祭りの活気がなくなってしまった。そこで、牧場から本物の馬を借りて祭りを行なうようになり、活気を取り戻した。しかし、1980年代のバブル期に多くの牧場経営が倒産した。この地域の地場産業の変化に伴い、牧場から高額の費用で馬を借りださなくてはならなくなり、1990年代からは3匹の馬しか出すことができなくなった。氏子が少なくなり、寄付も減ったので、この祭りで馬を借りることはたいへんになったが、それでも、祭りで一番人気の神輿と馬の対決を続けていくために馬を借りることにしている。

行政は、1990年の馬出し祭りを行方市の無形民俗文化財に指定した。そして、この祭りを観光と結びつけるために祭りの写真コンテストなどの宣伝をすると、写真愛好者や観光客が集まるようになった。しかし、地元の人々は無形民俗文化財に登録されたこともあまり意識しておらず、したがって補助も得ていない。むしろ、写真愛好家などの観光客が増えていくことに対して、地元の人々は多くの人に見てもらいたいと思っている。だから、この祭りの継承に力を入れている。

馬出し祭りは、地域の少子化や過疎化、産業構造の変化など社会変化によって祭りの運営組織や祭りの要素など多くの変化があった。さらに、近年では、行政が推進した地域活性化事業によって、馬出し祭りの観光客は増加し、地元の人々だけで行われていた祭りから観光客に見られる祭りに変化した。伝承者は、変化しつつある儀礼の中で、自ら変化してもいい部分と変化できない部分を分けて、伝統儀礼を継承していること分析した。

第4章は、大阪市難波の「綱引き」神事を事例として、地域の観光化と祭祀儀礼の変化を分析した。難波八坂神社の祭りである「綱引き」神事は、都市部の8つの町内会が氏子になり、ヤマタノオロチを象徴する綱を毎年作り、その綱を担いで神社の周りを巡行して、疫病災厄を祈願する行事である。この行事は、明治以降現代に至るまで、さまざまな変化を繰り返してきた。まず、本来の「綱引き」神事は、「牛頭天王綱引」と言われ、正月十四日に若者が左右に分かれて大綱を曳き合い、勝った方が福を得るといふ綱引き行事だった。それが、明治になって神仏判然令が出されると牛頭天王綱引は中断され、明治30年ほどに復活された時は、神話に倣って綱をヤマタノオロチの

象徴とし、頭と尾を八つに分けて八頭八尾の大蛇を作った。そして、それで綱引きを行うのではなく、地域で担いで引き回す「綱引き」に変わった。この事は、資料には書かれているが氏子はほとんど分からなくなっている。

この神事には、昭和 30 年以降徐々に変化が生じている。以前は、大綱と小綱の 2 本が作られ、小綱は子どもが担いでいた。昭和 40 年代になるとこの都市部では少子化が進み、小綱は作られなくなった。また、その頃から観光化が始まり、この神事を見に来る観光客が増えてきた。それに伴って、見栄えを良くしようという事で、綱の中心の結合部に作られる男根の形を目立つように大きく作るようになった。さらに、綱の巡行は、氏子の領域を大きく回り、8 つの町内に設けられたお旅所をすべて回るものだったが、都市部で交通渋滞を引き起こす事から、昭和 60 年頃に警察からこのルートの巡行が禁止された。仕方なく、その後は神社の周りを巡行する短いルートに変更を余儀なくされた。また、若者が減って、綱打ちや綱引きで担ぐ氏子の数が大きく減少した。近年では、国内国外の観光客が多く見に来るので、綱打ちや綱担ぎにも観光客に参加してもらうようになった。

その他、「綱引き」行事にはさまざまな変化が生じている。とくに近年では、観光化が大きな影響を与えている。従来の研究では、観光によって自然環境や伝統文化が破壊される、つまり観光開発によって文化が切り売りされると警鐘を発する研究者もいるし、観光がホスト社会のアイデンティティを構築する場を提供するという見方もある。その中で、本論では、地元住民の主体性を主眼に置くべきだという視点から、観光化によって変化が加えられた部分もあるが、それは地元住民が主体的に変化を加えており、変化の中でもその伝統は継承するという努力を見てとることができる点を分析した。

終章では、スサノオ神話に由来する疫病退散儀礼の 4 事例をもとにして、その現代社会における変化とそれに伴う伝承を分析した。現代における祭祀儀礼の変化は、大きく「目に見える」構造的な変化と「目に見えない」伝承者の儀礼に対する認識の変化に分けることができる。前者は、地場産業の衰退、地域の少子高齢化及び生活様式の変化を含んでいると考えられる。後者は、外部環境の変化による祭祀儀礼に対する宗教的な認識の希薄化と氏子の人生経験を積むことによる祭祀儀礼に対する認識の変化がある。

祭祀儀礼に対する「原型」の認識は、研究者のものと当事者のものでは異なる。伝統文化の真正性は、「昔のままに保存すべきだ」とする本質主義的な考え方があるが、伝承者の考え方は祭りの本質的な部分である「原型」が変化しなければ、他の部分が変化したとしてもそれを変化とは認識しない。そのような祭祀儀礼の当事者性を指摘することによって、当事者である伝承者の視点から祭祀儀礼の変化を見ることが重要であるという伝承者の主体性に関わる研究視点を導き出した。

【論文審査の結果の要旨】

全体的な講評として、先行研究をよく読みこんで、4 つのフィールドでの調査が綿密に行われている点が評価された。1 年に 1 度しか行われないそれぞれの祭祀儀礼の調査を、2 年あるいは 3 年かけて調査しており、その過程で地元の人々との関係がうまく構築され、信用されることによって、当事者である伝承者の生の声を聞くことができている。それをを使う事によって、本論の方法論的核心である当事者の視点をうまく整理し、分析することができた事が高く評価される。

祭祀儀礼などの文化資源化は、その変化に影響を与えることがある。その変化の認識において、研究者と伝承者の認識にずれがあることを、「見える変化」と「見えない変化」などの事例分析から明確に導き出し、その分析を行った。伝承者に視点を置いたイーミックな研究視点は従来からそ

の有効性が指摘されているが、本研究では伝承者に視点を置いた分析の部分に動きがあり、その研究視点からの分析は成功している。

ただ、社会学の分野でよく言及されてきた文化構築主義の視点を援用しているが、現在ではその視点の再構築が行われている部分もあり、その使い方に気をつける必要があるし、むしろ文化構築主義を離れて民俗学の視点から分析することによる独自性が今後求められよう。

さらに、今後は東アジアにおける伝統芸能の継承をテーマにした研究の発展を期待する。

以上の審査結果に基づき、本論文は、研究テーマおよび研究方法の妥当性、論の構成と結論の正統性など博士論文として高い学術レベルにある点において、口頭試問を通して審査員一同の意見が一致した。その結果に基づき、本論文は、歴史民俗資料学研究科の学位請求を十分に満たす内容をもつ論考であり、姚琮氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与する事が適当であると認める。